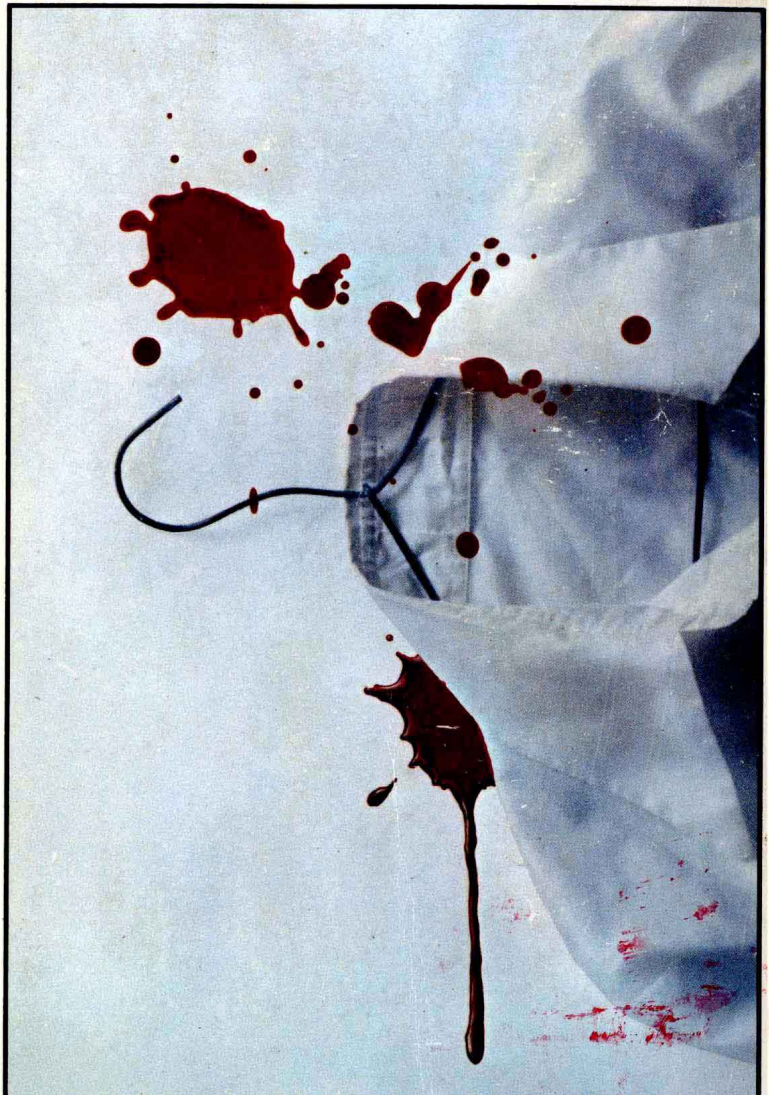
THE MOMENT OF TRUTH

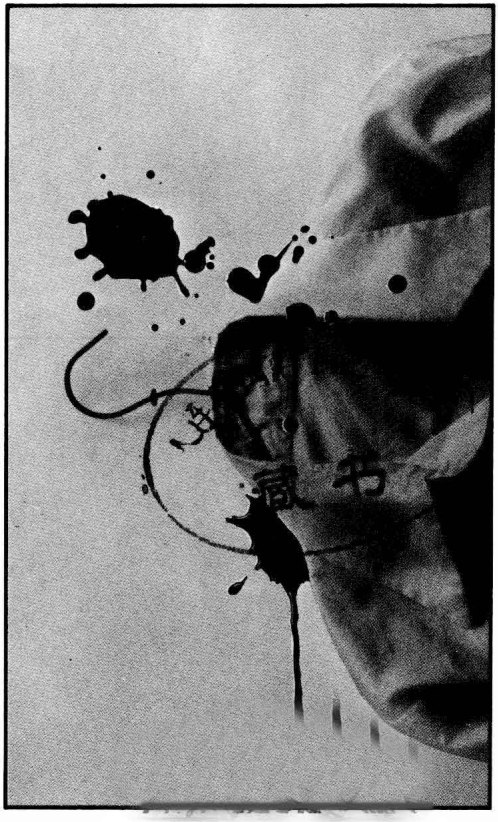
真実の瞬間

K. アルネ・ブルム ■ 吉野美恵子訳



の瞬間

K. アルネ・ブルム■吉野美恵子訳



角川書店

真実の瞬間

昭和54年 9 月30日　初版発行

訳　者　　吉野美恵子

発行者　　角 川 春 樹

発行所　株式会社 角川書店（かどかわしょてん）

東京都千代田区富士見2-13-3　郵便番号　102

電話（東京）(265)7111〈大代表〉振替 東京3-195208

多田印刷・鈴木製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

0397-791095-0946(0)

真実の瞬間

THE MOMENT OF TRUTH

(SANNINGENS ÖGONBLICK)

by

K. Arne Blom

Copyright© 1974 by K. Arne Blom

Published by agreement with

Lennart Sane Agency, Malmö 25, Sweden

through Tuttle-Mori Agency, Inc.

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

ルンドは実際おそろしいところだ。

——ルンドの一警官

これがスペインの闘牛だ
いまもなおそれは続き
法によって廃されることもなく
この世の何ものにも止めるすべはない

——スペインの詩

日曜日

秋近しとはいえ、その日曜日、大気にはなお夏の余韻が残っていた。夏はしぶとく居残った。最初の一撃でひっこんだりはしなかった。

戸外はまだかなり暖かいが、それでも木の葉は早や枝を離れはじめ、ほとんど絶え間なしにざっと降りこぼれて、陰気な秋の訪れを告げている。

そこにいまでは霧がくわわった。すでに幾晩か、灰色に塗りこめられ、ろくろく見通しのきかない夜があった。夜気は霧に湿り、冷たく肌を射した。もう十月である。

彼は車の運転席にはいった。七日、日曜日の十一時半のことである。彼はむしゃくしゃしていた。

日曜日を、あるいは十月という月を不快に思う個人的事情があるわけではない。

秋そのものがきらいというのでもなかった。

彼は妻に腹を立てていたのだ。

それも、まったくなんの理由もなしに。

なんともばかばかしいかぎりだ。二人とも立派な大人ではないか、ときに大人げない真似をす

るといっても、それは誰しも覚えのあることではないか。

そうとも、日曜日に恨みがあるはずもない。とりわけ仕事に出る必要のないときは。

それはまあ、日曜日はたいがいぶらぶらしているのだから、仕事に狩り出されてもなんとか我慢はできる。もちろん日曜日は一日休めるに越したことはないけれども、たとえ緊急呼び出しがあったところで、心の落ち着きを保つのに彼はさほど困難を覚えずにいられた。

幸いにも、そういうことはめったに例がない。

この日曜日の勤務にしてもすでに八月最後の水曜日からはやばやと予告されていたのだが、何時間ほどかかるのか、またなんのためなのかは不明だった。

実をいえば、掲示があったとき、彼はたいして気にとめなかったのである。

なんで貧乏籤を引きあてちまったのかと、それくらいのことはちらりと考えたような気もする。同僚にちょっとぼやいたりもした。ついているぜ、まったく、というようなことを彼は確か言った記憶がある。

だが、彼一人ではなかった。勤務予定表でこの日曜日が非番になっていた者全員が召集されているのだ。

彼女にもっと早く、十月の第一日曜日は臨時出勤になりそうだと言っておけばよかったと、遅まきながら自分の思慮の足りなさを悔やまぬでもなかった。

一言知らせておけば、今日はこんなふうにはじまりはしなかったろうものを。

次の日曜は臨時の仕事で二、三時間出なければならないと妻に告げたのは木曜日のことだった。

それが気にくわなかった、というよりも、彼女にすればよほどがっかりしたのだろう。その日曜日には、彼女の母の七十五歳の誕生祝いが催されることになっていたからだ。

「それじゃまあ、きみは一人で行くしかないな」

「ええ、そのとおりよ、あたしは一人で行きますとも」と彼の妻は答えた。

それ以後、彼女とはあまり口をきいていない。少なくともそのことに関しては。

だが、それからというものは何事につけても、二人のあいだで交わされる言葉の一つ一つにそこはかとない反感と、苛立ち、棘があった。木曜日の夜はそうした空気のうちに終始した。金曜日の夜も然り。土曜日はそれがまる一日つづいた。かててくわえて彼の好きなテレビ番組がその土曜日は休みで、デンマークのテレビ局をまわしてみてもやっていなかった。かくして土曜日の夜は完全に空費された。

日曜日の朝、目をさましてベッドから出てみると、妻が出かける仕度をして、ホールにいた。

「もう起きたのか」と彼はきいた。

「ええ」

そこではっと思いあたり、思わず彼は指を鳴らした。「そうか、義母さんの誕生日だったっけ……忘れるところだったよ。こんな早くから行くのかい？」

「そうよ、いまからすぐに。あなたは行かれないのよね？」

「ああ、おれはだめだ。それはよくわかってるだろうに」

「ええ、わかってるわ」

「けど、なにもおれのせいじゃなくて……」

「ええ、そのとおりよ、だから誰のせいだとも言ってないじゃない」彼女はかがみこみ、ブーツのジッパーを上げた。

「義母さんはおれ抜きで誕生日を祝わなきゃならんな」と彼は妻の背に話しかけた。「でも、だからって、生きてる甲斐がないとは義母さんだって思いやしまい……」

「ええ、そうでしょうとも」腰をかがめたまま、彼女はそっけなく言った。

彼が浴室から出てきたときには彼女はもういなかった。

珍しいこともあればあるもんだ——アニタのやつ、出しなに建物をばらばらにしかねまじき勢いでドアを叩きつけていくかと思ったのに。今朝のような気分にあるとき、あいつはきまってそうするんだが……

彼は電気剃刀を壁のソケットにさしこみに行こうとして椅子に躓つまずき、その拍子に剃刀を床に落として、調子をおかしくしてしまった。やむなく普通の剃刀でガリガリやったところ、切り傷をこしらえ、それでよけいむしゃくしゃして、腹立ちまぎれにウィスキーを一杯、からっぽの胃に流しこんだ。

ウィスキーも不愉快な気分を晴らしてはくれなかった。そのあとで朝食をとったのだが、ひどい味がした。なかでもトーストがいっとうまずかった。

家を出たのが十一時半、それから何も意識にとめずに町なかへと車を走らせた。怒りっぽい女たち、臨時の出勤、外国の独裁政府と、日曜日一般を、彼は小声で呪っていた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

その日が秋には稀な美しく晴れわたった日であることさえ気づかなかった。
警察本部の構内で車を止めた。正午まであと十六分と少々あった。
彼は車を降りてロックし、制帽をかぶると、集合場所にあてられた部屋のほうへ歩きだした。
彼の名前はイエヴェルト・カールソン、警官で、年齢は二十八、六フィート三インチとかなり上背があり、ひょろひょろに痩せている。黒い髪を短く切りつめ、足が大きい。全体の印象を言えば、いたって好ましい感じの男である。
勤務を終えて帰宅するころにはアニタも帰っているだろうかと彼は考えた。いつも彼らのいさかいのあとには優しい仲直りのひとときが訪れ、それからまた次の小さな喧嘩まで、長い間があるのがふつうだった。
時間が速く過ぎてくれればいい、今日はさして刺激的な出来事もない平穏な日であってほしいものだ、と彼は思った。なるべくなら、何事もないほうがもっといい。

ルンドの町はダンスと酒に暮れた前日土曜日の疲労からいまようやく立ちなおりつつあった。
大聖堂で、日曜礼拝の準備がはじまっていた。
通りにはウィンドウ・ショッピングをしながら歩道を行く人々の姿があった。
ルンタゴート公園ではむさくるしい風体の人物が四、五人車座になって、赤ワインを三本とビールを八本あけているところだった。一同は今日が日曜日か否かで議論していた。
たしかに、日曜日にしてはあまり散歩者がいなかった。家族連れが数組。連れのない孤独げな

散策者の姿もちらほら見受けられる。愛が芽生えてまだ二日と経っていそうもない、いかにも恋におちたばかりという感じのカップルが一組、二組。

一組の男女がストーラ・ソーデルガーカンをゆっくり歩いていく。彼らは自分たち二人がこの世にあり、そして一緒にいられることで、幸せに酔っているかのように見えた。自宅から車で来て、聖マルティン広場に駐車し、しばらくそぞろ歩きを楽しんでいるところだった。男は薄手のオーヴァーを着こみ、金髪である。女は妊娠しているのだろう、茶色いコートに包まれた腹部が目立ってせりだしていた。さまざまな事柄を語りあいながら、二人はつなぎあった手を片時も放さなかった。

大聖堂の鐘が十二時を告げたとき、警察本部の集合室には人声がどよもし、黒い制服に埋めつくされた室内に煙草の煙が充満していた。

主任警視のグスタフ・ファルクは二分遅れて到着した。中背をやや下まわる小肥りの人物で、アヒルのようにドタドタと、元気一杯の足どりで歩く。丸顔に、明るい表情をたたえていつも細められている目、頭髪はことに頭頂のあたりが白くなりかけている。温和な顔立ちになにがしかの個性を添えているのは、おそらくその目だろう。眼鏡を用いずにすむのは幸いというべきで、彼のこぢんまりした鼻はとても眼鏡を支えきれそうにもない。

グスタフ・ファルクの制服はぴしっとプレスしてあり、磨きあげられた靴はまぶしいほどの光沢を放ち、まさに全警察官の手本といったところだが、惜しいかな、片方の靴下の踵に小さな孔があいていた。

部屋にはいった彼は一大集団を目にしてちょっと立ちどまり、ぎごちなく微笑すると、短い脚を踏みならして演壇に歩を運び、一重ねの紙を机に置いた。

それから一同を見渡すと、新米警官、臨時勤務の連中、特別警備班の警官隊と実習生から成る集団の全員が、いまでは興味ぶかそうに彼を注視していた。

「おはよう、諸君」とファルク主任警視は言った。いかめしい制服とはおよそ縁遠い感じの、深みのある柔らかな声である。

「おはようございます」と、なかに一つだけ「オッス」というのをまじえて、もぐもぐ答える声が返ってきた。

「オッス」と答えたのはどいつだろうとファルクは思った。「掛けてくれたまえ、だいぶ混みあっているが、なるべく譲りあって楽にしてくれ。椅子が足りないようだったら、立っている諸君はそのままで辛抱してくれたまえ。そう長くはかからんから」

これだけ大人数の警官が一堂に会することは稀だった。「よほど厳粛な場合でなけりゃ、こんなことはあるもんじゃない」と警官の一人がまじめくさった顔で言ったものだが、これは正鵠を射た評といってよい。

一九六八年の大学創立記念祭のときに一度、つづいて同年の秋、病院の創立記念日に関連して、これと同じことがあった。最近の二回はパルメ首相がルンド市を訪問したときである。ヴァルムラント出身、長身のエルランデル首相が長期政権を保持していたあいだは、厳重な監視や万全の警備態勢が必要とされたことはかつて一度たりとなかった。しかし、パルメはそれを要求した。

パルメとの夜々もいまでは過去の歴史になった。首相はさしあたり学生と会って問題を話しあう用意がない。首相はかつて文相をつとめた経験もあるのだが、その彼の自信の欠如は、意地の悪い観察者からは、いまもって自身の立場を弁明する余地が見つからないことに起因するのだと考えられている。

一九六八年の秋、軍の新兵徴募時には仕事が急増し、公安警察の干渉に手を焼かされながらも、市警察当局は最高度の厳戒態勢をしいた。以後の二、三年間も過激派による大学の建物の占拠があいつぎ、超過勤務は必然的に増加した。

それにまた、いつであれ外国の政治家とか外交官がルンド市を訪れるときも、臨時の勤務が要求される。

とはいえ、全体的に見れば、警察力の大がかりな動員はいまや過去のことになった。近隣の警察管区から人手を借り、手持ちぶさたな時間を乗用車やトラックの検問にあてるにしろ、あるいは詰所でのカード遊びでつぶすにしろ、ともかく郊外にまで予備の人員を配置しての、完璧な警戒態勢——これはもはや、一九六八年から一九七〇年にかけての、不穏な時代の一章におおむね組み込まれた。

いまは一九七三年である。

いまでは、左派系の総じてごくおとなしいデモにたいし、型どおりの警戒を行なう程度にすぎない。ただし、例外もある。

「概要を説明する前に」とファルク主任警視は言葉をつづけた。「署長のほうからお話がある」

ファルクが着席すると、彼のあとから部屋にはいってきた警察署長が演壇の右手に歩み寄り、机に片肘をあずけた。

「簡単にすませよう」署長は言った。「ただ、この機会に二、三述べておきたいことがあるので。まず、マルメ、イスタード、エースレヴ、トレレボリ、ヘルシンボリの同僚諸君に挨拶したい。よく来てくれた。われわれの支援に駆けつけてくれたことを諸君に感謝する。ここに集まった諸君の誰もがたぶん知ってのとおり、本日のような大規模の非常呼集はこのところ――幸いにして、と言うべきだが――異例のことだ。あの当時の警察関係者のなかには、かつてのあの騒然たる時代、ここルンドでわれわれが経験したあの不快な一時期を、まだ記憶している諸君も大勢いるだろう。言うまでもなく、左翼の学生による騒ぎが頻発して、われわれに無数の問題を負わせた時期のことだが」

署長は咳払いをした。

「本日、われわれはまた別の状況に直面している」と言葉を継ぎ、「最近では世情も比較的落ち着いてきたことではあるし、願わくば今後ともこの傾向がつづいてほしいものだと思う。しかしながら、われわれとしてはいかなる事態にも対処しうるように万全の態勢を整えておかねばならない。本日も普段と変わりなく、深刻な、というか重大な性質の突発事態を見ることなしに、一日を平穏のうちに終わらせることも可能なのだ。われわれが――すなわち諸君が、何事もなきように万全を期するならばだ」

部屋のずっと後方の椅子から、イエヴェルト・カールソンがじっと署長をにらんでいた。話の

ほうは半分しか聞いていなかった。

何をくどくど言ってやがるんだろう、とイエヴェルト・カールソンは胸のなかで舌打ちした。今夜、アニタと仲直りできりゃいいが。

そのことを考えて彼は腹のむしゃくしゃを忘れようと努めた。彼女のきれいに日焼けした身体、うわむきの乳房、すべすべの腹と、脚の合わせめに淡くけむっている毛を思い描いた。想像してみろ、アニタがあのすんなりした脚を絡ませてきて、そこでおれも……

彼女の激しやすい気性と、日曜日の召集と、長広舌をふるっている署長への怒りが一緒くたになって押し寄せ、イエヴェルト・カールソンを現実に引き戻した。

「……二時十五分に政府の賓客が到着する。彼は大学総長と会見したのち、大聖堂を訪問、つづいて文化史博物館を駆け足で見てまわる。そのあと、四時三十分にマルメへ出発する予定だ。したがって、彼はおよそ二時間半、われわれの責任下にあることになる。お定まりの状況だよ、つまり、あらゆる種類の好ましからざる事態が発生しかねんということだ。なんらかのデモはまずあるものと見て間違いなかろう。これについては、われわれにできることは何ほどもない。単に、デモ隊が節度ある態度を守るよう注意するだけにとどめざるをえん。駆けまわったり、立ってアジっている者を制止したりすることもあまり望ましくない——過去の例を見てもこれは多分に言えることだ。ただし、過度に侮辱的なポスターなどは取りはずすように。つまり、英語、スペイン語、フランス語で書いてあるのはだ。スウェーデン語のは多少大目に見てやってもよろしい。聞くところによると、われわれの賓客はスウェーデン語を解さないそうだ。随行の通訳が馬

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com